子供の興味を引き出す接客に必要なこと

高等専門学校・物質工学科・4年

期間：令和7年8月13日～16日、26日（5日間）

私は、他者に対して科学への興味を引き出すにはどのようにすればよいのかなどを実際に体験し、将来自身で試行しながら就職活動に活かしたいと考え、今回のインターンシップに参加しました。本インターンシップでは5日間に渡って、アルギン酸ナトリウムのイオン架橋を利用したゲル化実験や、蛍光・蓄光成分を利用した視覚的実験などの、日替わりで行われる児童向け体験教室の用意や接客などの補助として企業の業務を経験させていただきました。

今回のインターンシップを通して最も大きな学びとなったことは、お客様、特に7歳以下のお子様への接客の対応に関するものでした。お子様への実験操作の補助が不十分であればお子様が事象に対して疑問や関心を持つ以前に投げ出してしまう一方、補助が行き過ぎてしまうとお子様の自主性を阻害して興味関心を失う可能性がありました。その為、お客様ごとの補助の塩梅を見極めるよう、補助を行う前にお客様をよく観察して塩梅を考える観察力の重要性について学ぶことが出来ました。

更に、補助の際にはお客様の理解度に合わせた説明を行ったり、実験の成果物を褒めたり、問いかけを行ったりすることでお客様の興味関心を引き出すなど、ただ内容を伝えるのではなく、お客様と同じ目線に合わせたコミュニケーションの工夫が必要であるということを知りました。

その他にも、実験に関する質問に答えられずにお客様の疑問を無下にしてしまうことがないよう、企画の事前確認や原理をよく調べてそれをお子様にも分かりやすく伝えられるように工夫する必要がありました。これは学校で行ってきた、「実験前に反応機構を調べて理解し、実験内容を読み手に分かりやすく伝える」という学生実験のレポート課題に必要な力と類似しており、これまでの課題にはしっかり意味があるということに気づきました。

今回のインターンシップに参加させて頂いたことで、相手を観察すること、企画の事前理解、相手の視点に合わせたコミュニケーションなどの重要性について理解を深めることが出来ました。今後はこれらの力を養うために、交流会に積極的な参加や、学生実験のレポート課題などを今まで以上に丁寧に調べて書くことなどを意識して取り組んでいきます。

また、お客様の接客をしていた際に「おかけください」を「お座りください」と間違えたり、「こちらでよろしいでしょうか」を「こちらでよろしかったでしょうか」と間違えたりするなど、自身の敬語や言葉遣いの未熟さを感じる場面が多々ありました。そのため今後は、社会人の方々との交流の場などを通して、正しい敬語やビジネスマナーに基づいたコミュニケーション能力を身に着け、より適切な対応ができるよう努力していきたいと考えています。

本と人をつなぐ仕事

大学・国際文化学部・・2 年

期間：令和 7 年 8 月 5 日～9 日（5 日間）

私は、図書館で 5 日間のインターンシップに参加した。図書館をインターンシップ先に選んだ理由は、本を読むことが好きで将来は図書館司書を目指しており、図書館で実際の業務を体験してみたいと考えたからである。また、今回実習を行った図書館は学生の頃からイベントや受験勉強などでよく利用した思い出が詰まった場であり、その裏側を知りたいと思ったことも理由の一つである。同館は、夜九時まで開館し、休館日が少ないなど、利用者がいつでも訪れやすい環境を整えている。また、明治維新や吉田松陰に関する図書を豊富に所蔵し、それらに関する専門的なサービスを提供している点も大きな特徴である。今回のインターンシップでは多岐にわたる業務を体験したが、本レポートではその中でも私にとって学びが大きかった三つの出来事を述べる。

１つ目は、雑誌登録や新聞の PDF 化、新刊の装備など図書館の裏方業務についてである。利用者の立場では知ることのできない業務だったが、図書が利用者の手に届くまでには多くの過程が存在することを知った。どの作業にも正確さと丁寧さが求められ、利用者が使いやすいように補強や検索のための登録など工夫がされていることに驚いた。これまで当然のように利用してきたサービスは、多くの人の手によって作り上げられていたことを実感した。

２つ目は、レファレンス業務についてである。大学の授業でレファレンスサービスについて学んだことはあるが、実際に体験してみると、さらに工夫がなされていることに気づいた。（実習先の）図書館では地域の歴史や文化に関するレファレンスには、図書館司書を通じて専門的な知識を持った方が対応する場合があり、専門性の高い質問にも対応できる環境が整っていた。今回のインターンシップでは、実際のレファレンス事例をもとに演習を行い、一冊の資料や一つのデータだけでなく、複数の資料を比べて情報の信頼性を確認する重要性も学んだ。こうした経験を通じて、レファレンス業務には利用者の求める情報になるべく正確に応えるための工夫がある事を知った。また、図書館司書は図書館の資料を適切に紹介することが重要な仕事の一つであり、利用者が具体的にどんな情報や資料を求めているのかコミュニケーションを通じて見極めることが大切だという言葉が印象に残っている。

３つ目は、子供たちへの読み聞かせ体験である。これまで幼い子供たちの前で読み聞かせを行ったことがなかったため緊張したが、練習の中で様々なことを教えていただいた。参加者や人数によって本を選んだり、座る位置や高さを調整したり、絵本を指差して注意をひいたり、場面に合わせて間を取ったりするなど、子供たちが飽きずに物語に集中できるような工夫がなされていた。この経験を通して、図書館が人と本をつなぐ場であることを改めて感じることができ、大変貴重な体験となった。

今回のインターンシップでは、資料保存、レファレンス、読み聞かせと言った多様な業務を体験することで、図書館業務や図書館の果たしている役割を知ることができた。「本と人をつなぐこと」が図書館の大切な目的だと教えていただき、図書館の業務は全てその目的につながっているのだと感じた。インターンシップで得たこれらの学びを今後の大学での学習や将来の進路に生かしていきたい。

机上の学びから現場の学びへ

大学・経済学部・3 年
期間：令和 7 年 9 月 8 日～12 日（5 日間）

私はこの度、税理士事務所において 5 日間のインターンシップに参加し、会計事務の業務内容や職場の雰囲気を実際に体験しました。今回の経験は、税理士という専門職への理解を深めるだけでなく、将来の進路を考えるうえでも非常に貴重な機会となりました。

私は現在、大学で公認会計士を目指して勉強しています。その勉強をしている中で、日々の学びが実際の現場でどのように生きるのかを想像するのは難しく、勉強と実務の繋がりが見えにくいと感じることもありました。そのため、今回のインターンシップを通じて、その一端を知ることができたのは大きな収穫であると感じています。簿記や会計の基礎知識は業務を理解する助けにはなりましたが、現場で求められる力はそういった知識にとどまりません。顧客から預かる資料は必ずしも整った状態ではなく、不足や誤りがあることもあります。それを確認し整理する必要があり、そこからどのように処理すべきか判断する力が求められます。加えて、申告や提出には必ず期限があるため、常に時間を意識しながら作業を進める必要があります。机上での勉強では正答を導くことが最終目的ですが、実務においてはただ計算するのではなく、「どう処理すれば最も正確で、かつ依頼者にとって最適か」ということを考えることも重要な仕事の１つであることを強く実感しました。また、税理士の先生方や職員の方々の仕事を５日間近くで拝見し、業務において、依頼者に寄り添い信頼関係を築くことの重要性も学びました。職員の方々の、複雑な会計処理や税務の内容を分かりやすく説明し、顧客の立場に立って最適な方法を一緒に考えておられる姿が印象的でした。専門知識を持つだけでは十分ではなく、それをどう相手に伝え、安心して任せてもらえるかという点も大切なことであると気づきました。こうした学びは、資格試験の勉強だけでは気づきにくい、実際の現場を経験することで得られるものであると感じました。

そして、5 日間の中で先生お二人と面談する機会をいただきました。試験のことや将来のこと、業務のことなどをお話し、普段はなかなか聞くことのできない内容や、相談したくても一歩踏み込めないような内容を率直に伺うことができ、心の中に抱えていたモヤモヤを解消することができました。お二人の先生はそれぞれ異なる経歴や進み方でこれまでを歩まれており、どのような選択もそれぞれに意味があること、目的地までの道のりは決して一つではないことを感じました。私はこれまで間違えることを過度に恐れていましたが、人生の選択において正解の方を選ぼうと悩むのではなく、自分が選択した道を正解にする努力というのが大事であると気づくことができました。

今回のインターンシップを通じて、勉強と実務の内容は異なるということ、机上での学びと現場での学びの両者が補い合って初めて専門職としての力になることを実感しました。現場で実際の業務に触れ、職員の方や先生方の働く姿勢を間近で拝見することができ、自分の進路を考えるうえでの視野が大きく広がったと感じます。今後試験勉強を進め、進路選択をしていく中で、最終的には自分自身が納得し、誇りを持てる仕事にたどり着けるよう、今回得た学びを力にして歩みを進めていきたいです。

動物たちを通して世界に目を向ける

大学・医療学部・2 年

期間：令和 7 年 8 月 15 日～19 日（5 日間）

就業体験を通して、展示動物との関わり方や飼育員の方々が動物たちのことをどのように考え飼育しているのか身をもって体験しました。実際の現場で動物たちの行動や健康を考えた展示の工夫、来場者への教育的な発信や取り組みまで幅広く触れることができ、貴重な経験となりました。まず印象的だったのは、アニマルウェルフェア向上のための具体的な飼育方法です。基本的に飼育者の安全を確保し、動物のストレスを軽減させるために動物と飼育者が同じ空間に入らないように配慮し、餌の与え方に工夫を施していました。その他に、餌を細かく飼育舎内に散りばめて配置する、大きい果物や野菜は切らずそのまま置く、動物が取りづらい箱の中に餌を入れるなど、野生下に近い採食行動を引き出す環境エンリッチメントの例を実際に見ることができました。これまでに学んでいた知識が実際の現場でどのように応用されているのか目の当たりにし、大きな学びになりました。

また、個人的に心に残ったのは、かつて動物園で飼育されていた個体について飼育員に尋ねた際のことです。その個体は 10 年以上前に飼育されていましたが、当時から動物園で勤務されていた飼育員の方々は全員その個体を覚えており、最期についてもご存知でした。多種の動物がいる中、一頭一頭に深い愛情を注ぎ長い年月を経ても記憶に残している飼育員の姿勢に強く感銘を受けました。また、入院室では野生保護の鳥や高齢で人の介助が必要な個体も終生飼養の理念の元に飼育されており、命と真摯に向き合う仕事であると実感しました。

園内で行われている来場者への教育的な発信として、飼育員による「ぱくぱくタイム」の時間がありました。来場者の目の前で動物に餌を与えながら解説をしており、動物の基本的な生態だけでなく、国内での飼育状況、世界中での個体数、絶滅危惧の有無、さらには減少の背景にまで解説があり、また、動物を通して環境問題に目を向ける工夫がなされていました。園内看板では森林減少の具体的数値やサステナブルラベルが示され、国際的な環境問題が私たちの生活にどのように影響するのか視覚的に理解でき、動物園の教育的役割を強く感じました。また、地域の方への教育活動の準備作業にも参加しました。マンドリルを題材に生息地付近の子供たちの労働問題や森林保護の必要性を認証マークを用いて説明し、環境保全や社会問題の解決に貢献できることを学べるように工夫されていました。動物をきっかけに、環境や人権といったテーマに関心を繋げる姿勢に深い学びを得ました。

今回の就業体験を通して、動物園が果たしている役割の多様性を学びました。動物の健康と福祉を第一に考える飼育管理、そして来場者、地域、社会へ向けた教育的発信や啓発活動のいずれも「動物たちを通して世界に目を向ける」という共通の理念があると感じました。

将来どのように動物と関わるのかは決まっていませんが、今回の経験を通して、動物への直接的な医療行為や飼育だけでなく、来場者やペットの飼い主、社会に向けた啓発や情報提供の重要性に気づくことができました。来場者と同じ立場で見学した際、動物が幸せであることで多くの来場者の笑顔が生まれる姿を目にし、「動物の幸せを守ることで人の幸せにつながる」という考えを胸に、今後の学びや将来に生かしたいと考えています。

地域の安心を支える一歩を学んで

高等専門学校・土木建築工学科・4年

期間：令和7年8月18日～22日（5日間）

私は今回、建設コンサルタントのインターンシップに参加させていただきました。参加のきっかけは、今自分が持っている測量や設計図面の知識が、実際の現場でどのように生かされるのかを知りたいという思いからです。また、将来は県内で働きたいと考えているため、地域密着型の建設コンサルタントの仕事を、体験を通して肌で感じたいという気持ちが大きかったからです。

インターンシップでは主に3D設計データ作成と現場の見学・体験をさせていただきました。3D設計データ作成は、実際の新幹線遮音板改良の業務に使用された二次元の図面を三次元モデルに起こすというもので、二つのアプリを用いて行いました。操作方法を社員さんに丁寧に教えていただき、また学校のCADの授業で得た知識を少しずつ生かしながら作業に取り組みました。その中で、実際の図面の内容一つ一つを見ていった際に分からない部分が多々あり、自分はまだまだ図面を絵のようにしか見られていないのだと痛感しました。そのため、部品それぞれの必要性や材料の種類などといった設計に関する幅広い知識と、頭の中で二次元を三次元に起こせる想像力をもっと身につける必要があると感じました。

現場見学では、附属物点検や橋梁点検、地質調査、環境調査といった多数の現場に同行させていただきました。点検器具を実際に少し体験したり、作業中の社員の方々の様子を近くで見たりすることができたため、今まであまり掴めていなかった現場の雰囲気や仕事内容を、身をもって体感できました。私が見学の中で一番印象深かったのはドローンを使用した点検作業です。人が行きづらい箇所や危険箇所を、ドローンを飛ばして撮影して撮ったデータをパソコンで三次元に起こして確認するという、デジタル技術を駆使した方法に感心しました。現場仕事の中では、どうしても自分には体力的に厳しい部分が出てくるだろうという心配が大きかったのですが、新技術の導入によって作業効率の向上や安全性の確保がなされているところを見て、心配は薄れていきました。また、ドローンの操縦には資格がいることから、技術士をはじめとした資格取得のための勉強についても積極的に取り組んでいくべきであると感じました。他にも印象深かったのが、地質調査と橋梁点検の現場見学の中で、地盤工学や構造力学の授業で習った内容に触れることがあり、学校で勉強したことが現場での判断材料になると実感できたことです。授業で学んだ知識が「テストのためのもの」から「人々の安心を支える仕事で使う知識」に初めて変わった瞬間でした。

他にも測量設計部会議の見学や会社周辺の測量、若手社員との座談会など、多くのことを体験させていただきました。この5日間を通して私は、建設コンサルタントの仕事は一人で完結するものではなく、多くの人との繋がりによって成り立っているのだと強く実感しました。会議の様子や、発注者や協力会社の方々とのやりとりから、何度も検討を重ね、仕事に誠実に向き合う社員の方々の姿勢に感銘を受けました。そういった建設コンサルタントの仕事の魅力と責任を知り、自分自身の進路を考える上で大きな刺激となったこの経験を生かして、今後地域に根差した人々の暮らしを支えられる技術者を目指して励みたいと思います。五日間、誠にありがとうございました。

実習を通して見えた自分のこと

大学・生物資源科学部・1 年

期間：令和 7 年 8 月 12 日～15 日（4 日間）

私は今回、将来動物飼育員として働くために、大学での学びに加えて課外活動にも力を入れたいと考えてこの実習に応募しました。4 日間動物園で実習をさせていただき、それまで漠然と抱いていた動物飼育員という職に対する考えを深め、自己理解を深める良い機会を得られました。

本実習で行ったことは、主に獣舎の清掃と餌の用意、そしてイベントのお手伝いや見学です。初日は、初めての本格的な飼育実習でとても緊張していました。担当の方と上手く喋れなかったり、指示を間違えたりして、学びにつながる良い実習にできないのではないかと、とにかく不安でいっぱいでした。しかし、実習が始まると、展示の方法や飼育の工夫について様々なことを考えるようになり、おのずと自分の口から聞きたいことが溢れてきました。担当の飼育員の方々は誰に質問をしても快く答えてくださり、自然と緊張もほぐれて、気が付けば集中して楽しみながら一つ一つの作業に取り組めるようになっていました。本実習を終えて、私が今後身に着けていきたい力は主に「伝える力」と「体力」の二つです。

今回の実習では、ふれあいイベントのお手伝いをさせていただきましたが、お客さんへの説明や子供たちへの声掛けに困ってしまうことが何度かありました。その際に、自分には伝える力が足りないということを痛感しました。実習中は、ふれあいイベントの他に飼育員の特別ガイドや、お客さんと会話をする飼育員さんの様子を多く目にしました。動物園は、展示を見てもらうだけでなく、展示に興味を持った人へその動物の生息環境の保護や繁殖の重要性などについて理解してもらうことも重要な目的です。お客さんがどんな情報に興味を持ってくれているのか、どんなアプローチが有効なのか、などの気づきを得るうえで、この実習はとても良い経験になりました。実際にお客さんと会話をすることができたのも良かったと思います。

次に、早急に身に着ける必要があると感じたのは、体力です。毎日実習が終わるととても疲れて、最終日に近くなると明らかに体が重く、動きが鈍くなっていました。動物飼育には休みがなく、動物園の飼育員となると通常の清掃、運搬などの体を使った仕事に加え、動物の観察、ガイドなど集中力の必要な業務を同時にこなす体力が必要になると思います。たった 4 日間の実習で疲れて動けなくなっているようでは、動物飼育員として働いていくことも困難になります。今後は、大学での実習や動物飼育、野外での課外活動に積極的に参加したり、基礎体力作りを行ったりすることが重要だと感じました。

今回の実習では、自分の欠点に多く気づかされただけではなく、今後飼育員になって達成したい目標について考える機会にもなりました。将来は、お客さんとの対話を通して、動物の魅力や域外飼育の必要性などの様々な知識を幅広い方に伝え、人と動物の懸け橋のような飼育員になりたいと思います。